

# 人生篇

## 映画文学人生論

0611) 胎児の世界 三木成夫 (1925-1987)  
0621) 絶望の精神史 金子光晴 (1895-1975)  
0631) 地獄の思想 梅原猛 (1925-)  
0641) 方丈記私記 堀田善衛 (1918-1998)  
0651) ゾウの時間ネズミの時間 本川達雄 (1948-)

人の一生は重き荷を背負いて遠き道を行くがごとし

人生とはなんぞや。徳川家康曰く「人の一生は重き荷を背負いて遠き道を行くがごとし。藤村操曰く「不可解」。芥川龍之介曰く「人生は一行のボオドレエルにもしかない」。アルベール・カミュ曰く「人生それ自体に意味はないが、意味がないからこそ生きるに値する」。

その他、似たりよつたりだが、もうすこし本を読んで、考えてみよう。次の五篇を選んでみた。

胎児の世界

三木成夫

絶望の精神史

金子光晴

地獄の思想

梅原猛

方丈記私記

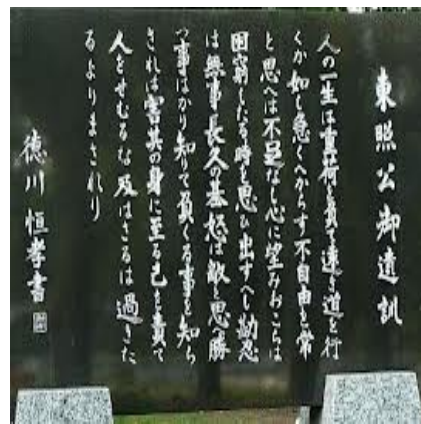
堀田善衛

ゾウの時間ネズミの時間

本川達雄

キーワードは、進化、絶望、地獄、無常、時間である。そのうちいくらかポジティブな意味をふくんでいるものは進化だ。『胎児の世界』によれば、胎児は十ヶ月の間に、古代の海からの生命記憶を夢のように再現するという。しかし、生物がどのような存在に向けて進化しているかはわからないし、将来は退化する可能性もある。

『絶望の精神史』は、明治、大正、昭和の日本人の絶望について具体例をあげ、「絶望の姿だけが、その人の正しい姿勢」と結論づけている。い



# 人生篇

映画文学人生論

わば絶望に居直ったかのような主張だ。作者の金子光晴が絶望しながら八十歳までしたたかに生きたところをみるとうなづけないこともない。

『地獄の思想』によれば、「人生は苦である」「けつきよく、老化であり、病気になることであり、死への道である」。苦しみをまぬがれるためには苦しみの原因をとりのぞくことだ。その原因とは欲望である。欲望をほろぼせば、苦しみはなくなる」と釈迦は説いた。欲望は不滅ならずや。

『方丈記』の作者鴨長明の享年は六十二歳。現代の基準からいえば、それほどでもないが、平安時代の末期から鎌倉時代にかけての動乱期の人にしては長生きだ。『方丈記』は無常を嘆じた書と評価は無常ともいえないような気もするが。

『ゾウの時間ネズミの時間』を読むと、時間について考えさせられる。ゾウはネズミよりも長生きだが、一生の間に心臓が鼓動を打つ回数が変わらない。生理的にはゾウもネズミも、ほとんど同じ時間だけを生きるという。人間の寿命と生き方との関係にも同じことがいえるかもしれない。

要するに、人間は地獄で絶望し、無常を体験する。個体としては一定の物理的時間または生理的時間を生きて死ぬ。種としては進化するが、やがて退化する。それを承知の上で、何を悩むか。

遠山に日の当たりたる枯野かな

虚子